

中世、伊勢の神宮（天照大御神 『古事記』、『日本書紀』には大日靈貴、天照大神、おほひるめのむち天照大日靈尊おほひるめのみこととも）を篤く崇敬した高僧の一人として、室町〜戦国時代の天台僧で、天台真盛宗の祖と仰がれる真盛上人（嘉吉三年〜明応四年・一四四三〜九五）を挙げることがができる。円頓戒と念仏の二門兼修を説く上人の宗風は、近江・山城のほか、生国の伊勢や伊賀・越前等の貴賤に及び、時の帝より上人号が、滅後には円戒国師号が下賜された。そんな上人が、寛正元年（一四六〇）、比叡登山の宿願成就を皇太神宮（内宮）に祈り、また明応二年（一四九三）には、豊受太神宮（外宮）の鳥居前町である山田を焼き払い、同宮の祝融を齎した伊勢国司北畠材親を激しく叱責している。此等の次第は、警咳に接した遺弟達が著した伝記や絵詞に記されており、上人が神宮（天照大御神）を如何に認識し、信仰していたのか、窺うことができる。

本発表では、こうした上人の伊勢信仰のなかでも、神体観に焦点を当てることにはしたい。というのも、どうやら上人は、天照大御神を男神と認識していたからである（『円戒国師絵詞伝』等）。

天照大御神が女神であられることは、今や常識に近いものがある。ところが研究史を繙くと、中世において、明らかに男神として描いている事例が幾つか報告されているし、また近世には、『内宮男體考證』なる書物を著す神宮祠官まで登場している。さらには、本来男性の太陽神であったのが、日之妻ひぬめとして奉仕した齋王の神格化に伴い、女神への転換を遂げたとする学説も存在する。ともあれ天照大御神⇨男神観は、日本の思想・文化史上において命脈を保ち続け、折に触れて顕現してきた感がある。

しかしながら、古代〜中世の諸書を獵渉するに、女神観が圧倒的多数である。男神観が謂わば異端であることは、鎌倉時代の醍醐寺僧通海（神宮祭主大中臣隆通の子息）が、「サテモ齋宮ハ皇太神宮ノ后宮ニ准給テ」云々なる巷説を、「何況ヤ太神宮ハ陰神ニヲハシマス。旁々可レ然モノキ荒説也」（『太神宮参詣記』上廿八）と断じていることから明らかであろう。ところが、真盛上人と同時代に活躍した、曹洞宗の大空玄虎（濶通仏性禪師。正長元年〜永正二年・一四二八〜一五〇五）もまた、大御神を男神と見做している（『正法山浄眼禅寺神明三物記』。当時の僧侶達の間には、上記觀念が膾炙していた点を窺うことができよう。その濫觴は、那边にあったのか。上人の修學歷から推すに、山王神道における一流派の所説と考えられるので、愚説を開陳して、大方の御批判・御叱正を乞うことにしたい。